

研究ノート

国会図書館蔵『曾我物語』覚書

— 〈曾我物語絵〉研究にむけて

宮 腰 直 人

同志社女子大学・表象文化学部・日本語日本文学科・准教授

Introduction and Commentary on “Soga Monogatari”
in the Collection of the National Diet Library

MIYAKOSHI Naoto

Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Culture and Representation,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Associate professor

1. はじめに

近年、軍記物語や語り物文芸を題材とする絵巻や絵入り本に関する関心が高まっている。従来から知られていた『平家物語』を題材とする絵巻や絵入り本、屏風絵に加えて、戦国時代を中心に武家や公家に愛好された幸若舞曲にも、物語を題材とする数多くの絵巻や屏風絵が各地に伝存されていることが判明し、軍記物語や語り物文芸は、文字テキストだけではなく、絵入り写本、いわゆる奈良絵本の挿絵や屏風絵といった絵画メディアも含めて論じる段階に入りつつある。

筆者もこうした研究動向に学びつつ、物語絵としての軍記・語り物文芸に関心を寄せ、いくつかの研究成果を発表してきた(1)。筆者が代表者をつとめた『曾我物語』を題材とする絵画作品に関する共同研究は、国文学研究資料館の公募研究に採択され、平成二十四年度と同二十五年度に共同研究を実施した。鈴木彰氏、出口久徳氏、斉藤研一氏、伊藤慎吾氏、目黒将史氏、市川廣太氏、植松有希氏とともに進めた共同研究は、短期間ながら研究分担者諸氏の意欲的な取り組みもあって、これまで捉えられていた『曾我物語』を題材とする絵画表象について、基本的な情報を整理し、その概要と論点を示した。その成果については、報告書『曾我物語』の絵画化と文化環境・物語絵・出版・地域社会(以下、報告書と略記する)を公刊し、文学研究だけではなく、美術史学や歴史学等の隣接分野にも成果を発信することができた。特に斉藤研一氏による曾我物語図屏風約四十点に及ぶ一覧は、美術史学に影響を与え、新出本紹介の機運をつくったように思われる(2)。また、曾我物語絵の重要画題の一つ、富士の巻狩図については、鈴木彰氏と斉藤研一氏の論考によって、地域社会における図像の享受と展開が明らかになり、新たな研究の地平を拓いた(3)。

筆者は研究代表者として、研究の統括と並行して『曾我物語』の絵巻や絵入り本を担当し、概要を執筆した(4)。『曾我物語』の絵巻や絵入り本は、流布本(仮名本)『曾我物語』十二巻十二冊から派生した系統と、『曾我物語』の要所を『吾妻鑑』等の叙述を組み合わせて、簡潔にした二巻本の『富士巻狩』の系統に大別され、さらに『夜討曾我』や『十番切』といった幸若舞曲の曾我物の絵巻や絵入り本も関連する作品群として位置付けることを試みた。

筆者は右の成果をふまえ、『曾我物語』の絵巻や絵入り本、幸若舞曲の曾我物の絵巻や絵入り本、そして両者の要素を備えた屏風絵を〈曾我物語絵〉としてあらためて把握し、物語絵画としての特質に迫ることを目指している。本稿では、〈曾我物語絵〉研究に本格的に取り組むための基礎作業として、新出の国会図書館蔵『曾

『曾我物語』十二巻二十冊（絵入り写本）の概要を紹介し、今後の課題を素描することを目指す。なお、本論で言及する〈曾我物語絵〉は、紙幅の都合上、図版を省略している。当該誌料は国会図書館や明星大学図書館のホームページでデジタル資料として公開されている。必要に応じてご参照いただきたい。

二、国会図書館蔵『曾我物語』について

まずは近時、国会図書館に収蔵され、すでにデジタル画像が公開された『曾我物語』について『国会図書館月報』七一三・七一四号の紹介(5)に従って確認しておく(以下、国会本と略記する)。

書名『曾我物語』 請求記号 WA32-23

形態 彩色写本(綴葉装) 十二巻二十冊 本文 每半葉一〇行 毎行十八字
内外

寸法 縦二三・五糎 横一七・一糎。挿絵一五三図。

管見の及ぶ範囲では、『曾我物語』の絵巻や絵入り本は、十二巻十二冊を基本とする流布本(仮名本)の本文に基づく。一卷から十二巻までの完本は、大東急記念文庫蔵本(二十五巻二十五冊 挿絵二二七図)や九州大学付属図書館蔵本(十二巻十二冊一五一図)がある。なお、一卷分を欠くものの、ほぼ完本とみられる伝本に米国議会図書館蔵本(二十五巻二十四冊・巻五欠 挿絵一二二図)がある。また、詳細は未詳ながら白鶴美術館蔵本(二十五巻二十五冊)や大英博物館蔵本(巻数未詳十二冊)も冊数から判断すると、それぞれ完本の可能性が高い。国会本を理解するためには、これらの諸伝本との比較対照が基礎作業となる。国会本は、綴葉装(列帖装)であり、同種の装丁である『保元物語』や『平治物語』等も視野に入れて絵入り本として、その位相を見定める必要がある(6)。

国会本の章段名は、流布本に準じ、本文も踏襲しているとおぼしい。今試みに国会本の各冊の章段を『曾我物語』の絵入り版本の基準になる正保三年刊本(国会図書館所蔵)の章段と対照すると、次の結果になる。

第一冊・第二冊(巻一)、第三冊・第四冊(巻二)、第五冊・第六冊・第七冊(巻三・巻四)、第八冊・第九冊(巻五)、第十冊・第十一冊・第十二冊(巻六・巻七)、第十三冊・第十四冊(巻八)、第十五冊・第十六冊・第十七冊・第十八冊(巻九・巻十)第十九冊(巻十一)、第二十冊(十二冊)。

流布本の一巻分の章段を二分冊する場合と、二巻分の章段を三分冊、あるいは四分冊する場合、そして一巻の章段に対してそのまま一冊を対応させる場合があるこ

とがわかる。こうした巻数と冊数の問題は、たとえば流布本十二巻十二冊の章段を絵入り本にしたた九州大学付属図書館蔵本と対照するとき、国会本の特徴を見極める指標の一つになるだろう。

全一五三図に及ぶ挿絵のうち、見開きは十四場面ある。次に各冊の章段名を摘記しておく。

第一冊	惟喬・惟仁の位争ひの事	第十冊	ふん女が事
	杵臼・程嬰が事		五郎大磯へゆきし事
第二冊	奥野の狩の事	第十三冊	ふじののかりばの事
	同じく相撲の事		げんたとしげやすがし論の事
第四冊	兼隆が打たるる事	第十四冊	ふねのはじまりの事
第六冊	鎌倉殿、箱根御参詣の事	第十六冊	十番ぎりの事
第九冊	呉越の戦ひの事	第十九冊	兄弟、神にいははるる事

『曾我物語』の代表的な場面である巻狩りの場面の数々や十郎の活躍を伝える十番切りの場面、十郎と五郎兄弟が弔われる場面等、物語の主要場面が見開きになっていることがわかる。あわせて流布本に特徴的な故事説話の数々も見開きになっている(7)。真名本に対する流布本(仮名本)の特徴がそのまま反映されているといつてよい。具体的な検討は別稿に譲るが、第九冊の「呉越の戦ひの事」は、見開きを二回用いている点で注目に値する。呉越のいくさ故事は、単独で絵巻や絵入り本になつており(8)、同時代の絵巻や絵本制作との照応が見込まれる。また、第一冊の「杵臼・程嬰が事」や第十四冊の「ふねのはじまりの事」も、それぞれ絵巻や屏風が知られ(9)、その関係が注目される。こうした見開きの場面群についても諸伝本との比較を軸に、近世前期の物語絵画の隆盛のなかで理解することが大きな課題になる。

三、挿絵の表現をめぐって

国会本の一五三図にも及ぶ挿絵を通観すると、物語の絵画をめぐって幾つかの興味深い点が見いだされる。ここでは、曾我兄弟による敵討の実行とその顛末が叙述される第十六冊から第十七冊に着目しておこう。第十六冊では、曾我兄弟による工藤祐経への敵討が果たされ、あわせて王藤内の殺害までが叙述される。この一連の場面では、祐経や王藤内に太刀をぬき、むかつていく兄弟の姿こそ描かれるものの、刀傷による流血などは、一切描かれることがない。これは寛永期の組み合わせ絵入古活字版(国文学研究資料館蔵)や正保三年刊の絵入り版本の『曾我物語』の挿絵

が斬首や手足の負傷などを描き、殺害に至るまでの経過を明示するのは対照的である。

第十六冊「十郎が討ち死の事」では、敵討を果たした十郎が新田四郎と対峙する場面が描かれている(図1)。千鳥柄の装束で太刀をふりあげるのが十郎で、それに太刀で応じるのが新田である。本文では十郎は新田に討たれ、最期を遂げるのだが、国会本の挿絵では、絵入り版本の挿絵では詳しく描かれる十郎の負傷の様子を採ることはない。通常、軍記物語や語り物文芸では、負傷を伴ういくさや戦いの叙述は重視され、絵画化においても一つの見せ場になると考えられる。ただし、絵巻や絵入り本においては、様々な工夫がみられる。

この点で参考になる指摘が出口久徳氏と星瑞穂氏にある(10)。出口氏は、二松学舎大学付属図書館所蔵『保元物語』と『平治物語』において処刑に関する章段をとりあげ、残酷な場面が回避される傾向があると述べる。同趣の指摘が海の見える杜美術館蔵『舞の本』(四十七冊)の挿絵に関して星氏によってなされている。星氏は『入鹿』や『景清』をとりあげ、絵入り版本との対比から、斬首の場面が避けられ、その結果、絵画化される場面に異なりが生じているのではないかと述べる。これらの指摘は綴葉装(列帖装)で挿絵を有する絵入り本において流血を強調する負傷の表現が避けられる傾向があることを示唆する。国会本の表現志向を把握する上で重要な指摘である。

第十七冊「五郎御前へ召出され聞めしとはるる事」では、捕らえられた五郎が十郎の斬首と折れた太刀を前に頼朝に尋問される一連の場面が叙述される。(曾我物語絵)に限らず、軍記物語や幸若舞曲において頼朝の存在感は大きく(11)、国会本でも繰り返し、烏帽子を着し、狩衣姿で纏綿縁の畳に座る頼朝が描かれる。本場面でも捕らわれた五郎時宗の前に座る頼朝がこの場面の中心となっている(図2)。ここで注目したいのは、頼朝と五郎時宗の前に置かれた太刀である。同じ場面を取り上げた『十番切絵巻』(明星大学図書館所蔵)の挿絵では十郎の首の脇に太刀を添えて描く。五郎が十郎の首とともに形見の太刀を確認するという趣向である。

こうした例に対して、国会本の挿絵は、正保三年刊本や『十番切絵巻』のごとく、五郎と十郎の首が対面し、表情を確認するように描かれていない。国会本では十郎の首は、五郎ではなく頼朝に向けられ、十郎の首は五郎とともに頼朝の方を向き、読者の視線を頼朝と五郎の間に置かれた刀剣へとうながす。結論的に述べれば、五郎と頼朝が対峙する構図は維持されているものの、国会本では十郎と五郎が「再会」を果たすという文字テキストが求める要所を採らない。敵討は、あくまで頼朝の視界において帰結することを、国会本の挿絵は示しているように思われる。ここでは

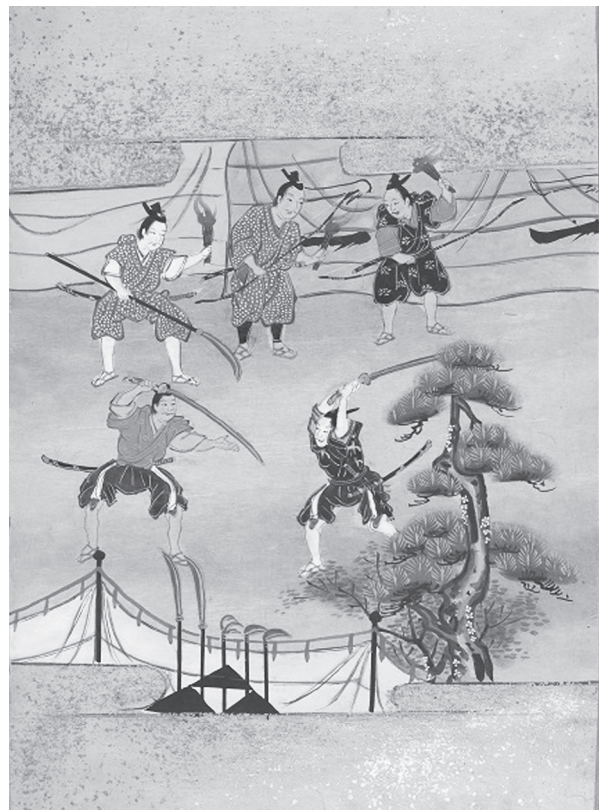


図1 国会図書館所蔵『曾我物語』第十六冊
(国会図書館デジタルライブラリー)



図2 国会図書館所蔵『曾我物語』第十七冊
(国会図書館デジタルライブラリー)

弟による兄の首の実検という凄惨な場面をさげ、十郎の折れた太刀にことの顛末を語らせているのではないだろうか。

この章段では五郎の太刀についての言及もあり、描かれた十郎の太刀と確定しにくい面もあるが、文脈上、刀身が露わにされている点を勘案し、十郎の所持品とみしておく。

鈴木彰氏は仮名本の『曾我物語』において曾我兄弟の太刀が十郎の伊東家への帰属をあらわす一方で、五郎が源家重代の友切を所持することの意義を論じる(12)。頼朝のもとに鬚切とともに友切が集められるという仮名本の志向を指摘する。首肯すべき卓見で、国会本が流血の凄惨な場面を描くことなく、整然とした頼朝の姿と太刀を描いたのは、太刀にまつわる価値観を重視する仮名本の志向の反映とも解される。先に確認した刀傷による流血を避ける傾向とあわせてみると、十郎の首から切り離され、頼朝の目前に置かれた太刀は、『十番切絵巻』とはまた異なる物語への志向をあらわしていることは間違いない。

先述の出口氏は『曾我物語』を含めた軍記物語絵における頼朝の対面場面を近世社会との接点で理解する視座を提唱し、絵入り版本の挿絵に描かれた頼朝に幕府を統制する「將軍」の面影を重ねる(13)。頼朝と太刀の取り合わせを描く国会本の理解においても重要な指摘である。綴葉装(列帖装)の物語絵の表現手法や場面選択の志向を踏まえ、頼朝の表象を検討することが次の課題として見えてくる。ここでは主に正保三年刊本や『十番切絵巻』との対比で国会本の表現志向を探ってみた。右の見通しについては、『曾我物語絵』や同時代の絵巻や絵入り本を対象に、太刀にまつわる文化事象も視野におさめ(14)、別途検討を試みたい。

四、おわりに

以上、新出の国会本の概要を紹介し、挿絵の考察を手がかりに『曾我物語絵』にまつわる問題の一端を論じてきた。本稿の冒頭で述べたごとく、軍記物語や幸若舞曲の絵巻や絵入り本が各地に相応の質と量をそなえた物語絵のジャンルであることが明らかになりつつある。だが、残念ながら現時点では、絵巻や絵入り写本について制作の状況を具体的に伝える資料は少なく、断片的な考察に留まらざるを得ない。また、物語絵の読者や観者の様相を知ることができず資料も限られており、物語本文とその絵画の様相を個別に説明するという基礎的研究の重要性があらためて認識される。また、本稿で問題を素描した物語と絵画の交錯から導かれる様々な表象の分析を積極的に試行することも必要になる。『曾我物語絵』は、絵巻や絵入

り本、屏風絵、絵馬と多様な絵画メディアを包括する。また、『曾我物語』はもちろん、能や幸若舞曲や古浄瑠璃といった諸芸能ともかわる。中世から近世にかけての文芸と絵画の交渉の歴史を明らかにするうえで恰好の領域である。本稿で論じた国会本については『曾我物語』の絵巻や絵入り本諸伝本との対照をはじめ、取り組むべき課題は多い。続稿を期したい。

注

- (1) 拙稿「語り物と絵画の交錯―絵入本『烏帽子折』小考」(『国文学 解釈と鑑賞』七十四巻十号、二〇〇九年九月)、同「和田酒盛譚考―『曾我物語』・舞の本・古浄瑠璃正本の挿絵をめぐって」(『国文学研究資料館紀要』三十九号、二〇一三年三月)等。
- (2) 斉藤研一「『曾我物語』図屏風」作品一覧・図版掲載文献一覧(『曾我物語』の絵画化と文化環境―物語絵・出版・地域社会)人間文化研究機構国文学研究資料館、二〇一六年三月)。斉藤氏の「一覧以降の代表的な研究に、三戸信恵「曾我物語図屏風に関する一考察」新出本と渡辺美術館本を中心に」(『国華』一二五巻十一号、二〇二〇年六月)及び小口康仁「曾我物語図屏風」の展開―富士巻狩・夜討図から富士巻狩図へ」(同誌)等がある。
- (3) 鈴木彰「ミュージアム知覧蔵平峰家本『富士巻狩図』について―門之浦本・榎木家本とのあわいを探る―」(注2前掲報告書所収)、斉藤研一「下野狩図」覚書(注2前掲報告書所収)。
- (4) 拙稿「『曾我物語絵』の諸相―絵巻・絵本の基礎的研究」(注2前掲報告書所収)。
- (5) 貴重書等指定委員会「第五十五回貴重書等指定委員会報告 新たな貴重書のご紹介」(国立国会図書館月報)七一三・七一四号、二〇二〇年九・十月)。
- (6) 石川透「奈良絵本『保元・平治物語絵巻』について」(『源平の時代を視る―二松学舎大学付属図書館所蔵 奈良絵本『保元物語』『平治物語』を中心に』思文閣出版、二〇一四年)の示唆に拠る。なお、この点に関して注5前掲紹介文にあるように、国会本の挿絵には、制作の過程をうかがわせる墨書がみられる。挿絵の有無に関わらず『曾我物語』の写本がどのような場で制作されたのかを知る手がかりは少ないが、新美哲彦氏が紹介した伝三条西実枝筆『源氏物語』の表紙裏反故のなかに、幸若舞曲『百合若大臣』などともに『曾我物語』に関する記述があることは注意される。新美哲彦「近世前期の写本

製作—伝三条西実枝筆『源氏物語』表紙裏反故から—」(『源氏物語の受容と生成』武蔵野書院、二〇〇八年) 参照。

- (7) 曾我物語の故事説話については、村上美登志「『曾我物語』と傍系説話—婆羅門説話をめぐる—」(『中世文学の諸相とその時代Ⅱ』和泉書院、一九九六年)、同「『曾我物語』と傍系故事説話—「李將軍」「杵臼・程嬰」「玄宗・楊貴妃」説話をめぐる—」(『中世文学の諸相とその時代Ⅱ』和泉書院、二〇〇六年)を参照。問題の射程については、池田敬子「仮名本の世界」(『曾我物語の作品宇宙』至文堂、二〇〇三年) 参照。

- (8) 小林健二「『太平記』を題材とした絵巻・絵本—スパンサーコレクション蔵『異域物語』を中心に—」(『説話文学研究』四十六号、二〇一一年七月)。

- (9) 杵臼・程嬰説話の絵巻と屏風については、土谷真紀「『程嬰杵臼豫讓絵巻』—小絵絵巻への視野—」(『初期狩野派絵巻の研究』青簡舎、二〇一九年)、マシュー・マッケルウェイ「新出『程嬰杵臼豫讓図屏風』考察」(『国華』一二七巻九号、二〇二二年四月)等を参照。「舟のはじまり」説話及び絵巻については、浜中修「『舟のあとく』の形成」(『室町物語論攷』新典社、一九九六年)、「舟のあとく絵巻」解題」(國學院大學研究開発推進機構校史・学術資産研究センター編、二〇一四年) 等参照。

- (10) 出口久徳「描かれた『保元物語』『平治物語』の世界—二本松本を中心に—」(注6 前掲書所収)、星瑞穂「奈良絵本『舞の本』と版本の挿絵の関係性」(『舞の本を読む 武將が愛した舞の世界の物語』三弥井書店、二〇一四年)。

- (11) 出口久徳「寛文・延宝期、軍記物語版本の挿絵の表現をめぐって」(『いくさと物語の中世』汲古書院、二〇一五年)、林茉莉「絵入り版本『曾我物語』考—挿絵に描かれる頼朝と曾我兄弟を中心に—」(『語文論叢』三十五号、二〇二〇年七月)を参照。

- (12) 鈴木彰「源家重代の太刀と曾我兄弟・源頼朝—『曾我物語』のなかの「髭切」「友切」—」(『中世軍記の展望』和泉書院、二〇〇六年)、同「曾我兄弟所持の太刀と『曾我物語』—仮名本の流布と再生—」(『軍記物語の窓』第三集、和泉書院、二〇〇七年)。

- (13) 注11前掲出口論文参照。頼朝の表象については、大久保純一「頼朝のイメージと徳川將軍」(『武士と騎士』思文閣出版、二〇一〇年)も参照。

- (14) 注12前掲鈴木論文や渡瀬淳子「仮名本『曾我物語』の五郎像と源義経—斬り合う太刀の象徴するもの—」(『室町の知的基盤と言説形成—仮名本『曾我物語』とその周辺』勉誠出版、二〇一六年)等の成果をふまえ、筆者も絵巻や絵入

り写本、物語草子にしばしば登場する太刀及び刀剣の表象についてさらに考えてみたい。

【付記】

本研究は、JSPS 科研費20K00305の成果の一部である。

